様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：３３９２１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０３８４

研究課題名（和文）1900-1920年代日本におけるフランス芸術の受容ー総合芸術誌「明星」を中心に

研究課題名（英文）Influence of French literature on the Japanede one from the 1900s to the 1920s

研究代表者
山田　登世子（YAMADA, toyoko）

愛知淑徳大学・　・名誉教授

研究者番号：９０１００５４４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：　「明星」全148巻、「スバル」全60巻の精読、およびこの二誌にかかわった詩人や作家--与謝野鉄幹、上田敏、北原白秋、石川啄木、堀口大学ほか--の作品研究と渡仏体験の検証によって、明治大正期、ことに1900年代-1920年代の日本文学にフランス文学が大きな影響をあたえたことを認識した。
　また、このようなフランスの影響は絵画の領域においても同様で、この時代は「洋画家」の誕生の時代でもあり、文学と美術の間の緊密な交流があったことを認識した。

研究成果の概要（英文）：By intensively reading the Myojo (148 volumes) and the Subaru (60 volumes), and by examining the works and travel and stay in France of poets and novelists who were concerned in the two magazines (including Tekkan Yosano, Bin Ueda, Hakushu Kitahara, Takuboku Ishikawa, Daigaku Horiguchi and so on), I discovered great influences of French literature and culture on the Japanese literature in the Meiji and Taisho epochs, especially from the 1900s to 1920s.
　In addition, I recognized that the same French influences were also found in the field of painting, and that these epochs overlapped an age of birth of the artists of Western painting, meaning close exchanges between literature and painting.

研究分野：フランス文学・文化

キーワード：「明星」　「スバル」　翻訳　渡仏　日仏文化交流　印象派　白馬会

１．研究開始当初の背景

明治・大正期に刊行された文芸雑誌のなかで、「明星」は与謝野晶子の短歌が掲載された雑誌としてのみ知られ、これを全巻読み通して論じた研究は皆無なので、明治大正期の日本文学研究に大きな欠落があると思っていた。これに関連して、「明星」の創刊者である与謝野鉄幹の評価が不当に低く、再評価の要があると考えていた。

２．研究の目的

「明星」全巻を精読し、あわせて第一次「明星」と第二次「明星」の間に刊行された姉妹誌ともいえる雑誌「スバル」全巻を精読して、明治大正期、なかでも「明星」創刊から始まる1900年代から1920年代の日本文学のいわゆる「耽美派」文学を、新たな視点から解読して、日本近代文学研究の一領野をきり拓く。

３．研究の方法

(1)第一次「明星」全100巻、第二次「明星」全48巻、「スバル」全60巻を精読した。

(2)上記の雑誌に寄稿した歌人、詩人、作家たちの全集を、上述の視点から研究した。とりあげた主な作家は以下のとおり。
与謝野鉄幹、上田敏、北原白秋、石川啄木、木下杢太郎、高村光太郎、島崎藤村、永井荷風、堀口大学。

(3)研究の進展とともに、「明星」が美術をも重視した画文交響の雑誌であるという認識が深まったので、「明星」の装丁を手掛けた藤島武二、和田英作、津田清風、梅原龍三郎などの画家たちについて関連文献を研究し、さらにはいわゆる「洋画派」を形成した黒田清輝をはじめとする「白馬会」の画家たちについても関連文献を研究した。

(4)(2)にあげた文学者で渡仏体験のある詩人・作家、および画家については、現地フランスに渡って滞在地をはじめとするフィールドワークを行った。具体的な視察地は以下のとおり。
与謝野鉄幹および梅原龍三郎のパリ(とくに鉄幹の下宿と梅原のアトリエのあったモンマルトル)、永井荷風のパリ(特に偏愛したカルチェ・ラタン)、ならびに勤め先の銀行の在ったリヨン、島崎藤村のパリ(特にモンパルナスの下宿)、ならびに第一次大戦時の疎開先のリモージュ、木下杢太郎のパリ(下宿先のサン=シュルピス広場、勤務先のパストゥール研究所)、ならびに旅先のナポリ、ソレント、アマルフィなど。
さらに以下の研究成果の項に詳述するが、研究の進展とともに、「明星」派ではないが、大正時代の日本語の形成に少なからぬ影響をあたえたと思われる大杉栄についても、宿泊したホテルのあるモンマルトルと、投獄されたラ・サンテ刑務所を視察した。

(5)(3)に述べたとおり、「明星」は洋画家の作品を重視した雑誌であり、与謝野鉄幹は彼らと浅からぬ交流があったので、当時渡仏していた画家たちの多くが滞在したアトリエであるモンパルナスの「シテ・ファルギェール」、および彼らが通った美術アカデミー、「アカデミー・ジュリアン」などを視察した。

４．研究成果

(1)第一次「明星」全 100 巻を精読して、最大の発見であったのは、この雑誌が外国文学の翻訳を重視し、それに多くの紙幅を割いていることである。この事実は、明治 35 年 7 月号の「明星」において、雑誌主幹の与謝野鉄幹が、雑誌発行の目的の第一位に「西欧文芸の翻訳紹介」をあげていることにも明らかである。「新短歌の研究と創作」は第二位にすぎない。にもかかわらず、与謝野晶子論をはじめとする当時の文学研究が全くこの事実認識を欠いていることを痛感した。

(2)上記の認識により、1900年代から1920年代における西欧文芸の翻訳の研究が本研究の大きな課題の一つとなった。そのことは、文語訳から口語訳へといたる近代の日本語それじたいの形成史を問うことにつながるものであり、これが本研究の傍流となって、問題領域が大きく広がった。

(3)与謝野鉄幹が翻訳を主眼としたのは、新詩社同人に優れた翻訳者がいたからこそできたことである。その翻訳者が上田敏であり、この優れた翻訳者は、帝国大学英文科で彼の師であったラフカディオ・ハーンをして「英語で完全に思考し表現し得る人と成る事のできる一万人中一人の日本人学生」と言わしめたほど桁外れな語学力を有した俊才であった。鉄幹はこの上田敏の訳詩掲載を「明星」の華としたのである。この事実は、彼の訳詩が与謝野晶子の短歌よりはるかに大きい特大の活字で誌面を飾った事実一つみても明らかである。にもかかわらず、上田敏の訳業の研究は、日本文学研究においても、フランス文学研究においても極めて少なく、ましてそれを初出雑誌「明星」との関連で論じた論は皆無である。本研究はこのような視点にたった初の上田敏研究となった。

(4)上田敏の翻訳研究は、何よりまず「明星」に掲載された訳詩をベースに編まれた訳詩集『海潮音』研究から始まるが、ここで最も多く訳されているのは、世紀末から 1900 年代にいたるフランス象徴派の詩であり、ボードレール、マラルメ、ヴェルレーヌ、アンリ・ド・レニエらの詩である。これらの象徴派の

詩を、上田敏は典雅で流麗な文語に移しかえた。この『海潮音』は北原白秋をはじめとする若き詩人たちに圧倒的な影響をあたえ、フランス文学への深い憧憬を抱かせた。永井荷風の終生にわたるフランス憧憬もまた上田敏の影響によるものである。こうして本研究は、白秋、杢太郎、荷風などのフランス憧憬とその淵源を分析した初の研究となった。

(5)このような翻訳とその影響の研究は、近代日本語の形成という問題ときり結んでいる。たとえば「憂鬱」や「倦怠」といった言葉とその感性はフランス象徴派の影響によって生まれたものである。白秋の『邪宗門』がその代表的な作品だが、こうした近代の感性を習得し、表現にもたらした文人として忘れてならない一人が「明星」への訳詩掲載を主導した与謝野鉄幹そのひとである。鉄幹の最高傑作である短歌集『相聞』が上田敏に捧げられている事実を指摘したのはおそらく本研究が初めだと思うが、この事実も語るとおり、『相聞』はフランス象徴派の憂愁と退廃を自らのものとして詠んだ秀作がきわめて多く、再評価されるべきだという思いを深くした。

(6)以上は第一期「明星」ならびにそれに続く「スバル」によってもたらされた近代の感性とその言語表現であるが、大正 10 年から昭和 2 年(1921-27 年)にわたった第二次「明星」は、上田敏が第一期「明星」で占めた位置を堀口大学が占め、ポスト象徴派のジャン・コクトーやアポリネールなどの訳詩に代表されるモダンな口語の訳詩がモダンな感性と表現とを生み出した。いわゆる現代詩はここから始まるのである。さらに詩だけでなく、堀口大学による 1920 年代のフランス小説の翻訳は、日本の小説家に圧倒的な影響をあたえた。三島由紀夫がラディゲの小説『ドルジェル伯の舞踏会』の堀口訳を絶賛したのは有名だが、さらに広範な影響をあたえたのはポール・モラン『夜ひらく』の訳文である。象徴派の憂愁と倦怠に代わって、アップテンポなスピード感に満ちた文体は横光利一をはじめとする「新感覚派」の文学をうみだした。この事実はあまりにも有名なので日本近代文学史の常識となっているが、その『夜ひらく』初出の一部が「明星」であり、堀口大学が新詩社同人であったことは全く等閑視されている。本研究は、このことを明らかにして「日本語の近代」に「明星」が果たした役割を初めて析出した研究となった。

(7)以上は「文学」の領域にわたる研究成果だが、「日本語の近代」を考察するには領域を異にする同時代の翻訳や評論も考察すべきだと考え、大杉栄の作品も考察の対象とした。彼のファーブル『昆虫記』の訳文は溌剌とした口語訳であり、渡仏体験を綴った『日本脱出記』もまた堀口大学以降の大正・昭和のモデニティの軽さとエスプリをたたえて、近代の日本語の一つの到達点を感じさせる。

(8)以上のような、言語表現にかかわる問題についての研究成果とともに、本研究は「明星」という雑誌が美術を重視し、ことに黒田清輝をはじめとする「白馬会」系の画家たちの作品を随時掲載した事実に着目した。おりしもカラー印刷の技術が開発された時期にあたっており、まさしく「明星」はこの点でも時代を先導した雑誌であったことを認識した。また、「明星」だけでなく、明治 35 年(1901 年)に刊行された与謝野晶子の『みだれ髪』の装丁と挿絵を手掛けたのが藤島武二であり、その意匠がアールヌーヴォー様式であることは美術研究の分野においても良く指定されるところだが、この美的様式は 1900 年パリ万博のメインテーマであった。同万博の視察に赴いた黒田清輝ら「白馬会」系の画家たちがフランス美術の最新動向を「明星」に伝えたのである。注目すべきはその最新動向の一つが「印象派」であることだ。従来、フランスの印象派絵画の紹介といえば武者小路実篤ら主幹の雑誌「白樺」の功績とされてきたが、「明星」がこれに先んじていることを認識したのも小さからぬ研究成果であった。

(9)以上の研究成果をふまえて、明治・大正期を代表する「明星」以外の文芸誌、正岡子規主筆の「ホトトギス」、武者小路実篤主筆の「白樺」、さらには平塚らいてふ主筆の「青鞜」などを本研究と同じ視点から研究し、「日本語の近代」ならびに生成期の洋画についての認識を深めたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 7 件）

①<u>山田登世子</u>　　アナキストのフランス--------大杉栄、「環」、査読なし、60 号、2015、294-315

②<u>山田登世子</u>　　鉄幹の巴里　藤村の巴里、「環」、査読なし、59 号、2014、386-407

③<u>山田登世子</u>　　ふらんす物語------芸術と肉体、「環」、査読なし、58 号、2014、298-315

④<u>山田登世子</u>　　印象派という流行、「環」、査読なし、57 号、2014、350-362

⑤<u>山田登世子</u>　　青春------憂鬱と革命、「環」、査読なし、56 号、2014、342-359

⑥<u>山田登世子</u>　　「明星」というメディア、「環」、査読なし、55 号、2013、280-297

⑦<u>山田登世子</u>　　ヴィオロンのためいき、「環」、査読なし、54 号、2013、70-86

〔学会発表〕（計 0 件）

〔図書〕（計　１件）
①山田登世子、藤原書店、『「フランスかぶれ」の誕生-----「明星」の時代 1900-1927』、2015、271

６．研究組織
(1)研究代表者
山田 登世子(YAMADA toyoko)
愛知淑徳大学・名誉教授
研究者番号：90100544